

岩手県に於ける単級学校の調査

— 第 1 次 報 告 —

石 田 加 都 雄

Survey on the Small Schools
(One-Teacher-School) in the Iwate Prefecture

Katsuo ISHIDA

1

第 1 表

複式学校は 学習指導上、学校経営上、或は
学級経営上単式学校にない多くの障害を含んで
いる。今日なお 複式教育不振が叫ばれている
のは その多くの障害が打開されていないところ
からきている。それでも、大正の中期頃は複
式教育研究の業もいくつか発表されていたので
あるが、それ以後は殆どあらわれていない。お
そらく、全国的にみると 複式学校はごく僅か
になつて、問題にするに足らなくなつたのであ
らう。が、岩手県では事情がいささかちがう。
この県の教育を考えると、複式学校は無視で
きない。なぜなら 県下小学校の約半数は複式
教育を行つて居り、したがつて 複式教育の不
振は岩手県小学校教育の不振ともなるから。い
ま 小学校総数と複式学校数を市郡別にみると
第 1 表のようである。

本校、分校合せて小学校の総数は 761,そのう
ち 複式を全校或は一部採用している学校が
352,約46%である。右の表で、分校の殆ど全部
が複式校であるというより、本校の約26%が複
式を採用している事実が岩手県教育に於ける複
式学校の比重の重さをよく物語つている。

ところで、複式教育の解決法に二つある。一
つは複式学校を全部なくして単式の学校にし
てしまうことである。アメリカのコンソリデーテ
ッド スクールはこれを一つのねらいにしてい
るが、岩手県のように財力きわめて貧困、かて
て加えて山岳重疊して交通の至つて不便な地方
では、どんなにそれが最善の策であつても、コ
ンソリデーテッド スクールへの統合はのぞん

	全 小 学 校 数		複 式 小 学 校 数	
	本 校	分 校	本 校	分 校
盛 岡 市	15	0	1	0
釜 石 市	7	0	1	0
宮 古 市	9	3	2	3
一 関 市	8	2	1	2
大船渡市	8	1	0	1
岩 手 郡	51	23	12	20
紫 波 郡	20	7	1	4
稗 貫 郡	28	5	8	4
和 賀 郡	46	17	13	17
膽 澤 郡	35	19	4	14
江 刺 郡	15	20	1	17
西磐井郡	25	7	1	6
東磐井郡	33	15	1	15
氣 仙 郡	25	9	4	9
上閉伊郡	38	18	13	18
下閉伊郡	45	59	12	59
九 戸 郡	63	8	35	8
二 戸 郡	58	19	27	18
計	529	232	137	215

でもえられないことである。

とすれば第二の策をとる以外にない。これは
複式教育をそのまゝにしておいて、複式教育が
含んでいる多くの問題をきわめ、それを一つ一
つ排除していくのである。そして、この問題を
さぐり出すために調査研究が必要になつてく
る。

ところで 複式教育といつても いくつかの
種類がある。即ち 二学年複式、三学年複式、
四学年、五学年、六学年複式である。このうち

二学年複式が最も多く、一番問題が少い。

本稿でとりあげたのは六学年複式である。この六学年複式の学校を単級学校というのである。この学校の教育、即ち単級教育は複式教育のうち学習指導上からいつて最も困難な教育である。これについて冗言の要はあるまい。二学年複式なら隣接学年を組合せたり、最低学年と最高学年と組合せて指導の便宜をはかることができるが、最低学年から最高学年まで、知能、体力、興味すべての点で異なる児童を同一教室にいて一人の教師が指導に当るのであるから、その困難はおもいなかばにすぎる。このほか、単級学校では他の複式学校と異なる社会事情があつて、これが大きく児童の学習に影響している。そこで、単級学校は複式学校の一つではあるが、障害をさぐりだすためには一応他ときりはなして単独に調査研究する要がある。

今回、単級学校の調査を行つたのは以上の理由によるのである。この調査は予備調査で、岩手県の単級学校が学習指導上いかなる問題を持つていのかをつかみ、今後の研究の方向を確定しようとしたのである。

岩手県の単級学校は45校。このうち 本校は下閉伊郡に一校だけ、他は全部分校である。これを郡別にみると、岩手郡4 紫波郡1 和賀郡2 胆沢郡1 気仙郡3 上閉伊郡2 下閉伊郡25 九戸郡3 二戸郡3 計45である。これに全部調査表を送つたが、回答のあつたのは28、そして、和賀郡を除いてはどの郡からも回答があつた。

2

回答にあらわれた学習指導上の障害を大別すると

六ケ学年複式からくる障害。

児童の経験領域が狭くて学習内容を理解させることが殆どできない。

児童の欠席、早退が頻繁で、指導が中断される。

の三つである。

まず、六ケ学年複式からくるハンディキャップから明にする。教師の問題としては一人で六ケ学年の教材研究は無理だというのである。単式学校であれば、教師は一学年の教材研究をやればそれで済む。が、単級学校では一人で六ケ学年の教材研究をしなければならないので、負担は当然過重になる。その上、単級学校の教師は学校事務、地域の社会教育、PTAの仕事、更に本校への連絡等、いわゆる雑務一切を一人で荷つている。しかも、出張の場合は完全に児童は指導者の手から開放されている。

指導面では、各学年に対する直接指導の時間が短く、その結果 充分な指導ができない。これは当然である。単式学校であれば同一学年に時間全部を直接指導に用いることができるが、複式教育の場合はそれをいくつかに細分しなければならない。単級学校の場合はそれを最も多い数で細分しなければならないから いきおい直接指導の時間は極度に短くなる。

その結果はどうなつているか。教師の眼に映じた姿は

全般的に進度がおくれる。

成績の悪いものはそのままおくらせていく。

更に具体的には

読書力が殆どない。

算数能力がさっぱりついていない。

国語算数の応用力に欠けている。

このような実状に対して 教師はどんな方法をとつていのか。まず、児童が直接指導を受けていない時でもあそびにならぬようにと工夫している。即ち、カードやワークブックを児童に与え、能率よい自習ができるようつとめている。この点に関し、教師の声は悲観的である。次は直接指導の時間をできるだけ長くするための工夫であるが、数学年同時同単元になるよう単元或は時間表を編成することにつとめている。例えば高学年の社会科 理科を低学年の放課後にもつていつたり、或る教師は三学年以上なら国語科、算数科は同単元でできるといつてころみている。しかし、同時同単元編成を全教科に亘つて行うことは無理で、音楽 体育など

第 2 表

村 役 場 迄																
距 離	3	4	5	6	7	8	10	12	15	16	20	24	28	32	計	
學 校 數	1	2	2	1	1	5	2	5	2	3	1	1	1	1	45	
郵 便 局 迄																
距 離	3	4	5	6	7	8	9	10	12	15	16	24	計			
學 校 數	1	3	2	2	1	6	2	2	3	2	3	1	45			
醫 師 迄																
距 離	3	4	5	6	7	8	10	12	15	16	17	20	22	28	36	計
學 校 數	1	1	2	2	2	5	3	3	2	1	1	1	1	1	2	45

は能力が非常にちがうので全児童同時に学習させることは到底できないと言つてきたのもある。

3

次に児童の経験領域が狭くて児童は教育内容を理解することができないという点である。即ち 児童の日常生活には学校で学習する教材が殆どないということである。これは学校や教師の問題をこえた教育上の重大な、しかも深刻な問題といわなければならない。今回の調査ではこの点をくわしく知ることはできないが、その幾分かがうかがえる。そして、この回答を是認することができる。

これらの地域の多くは近代的な文化機関も、公共機関も直接には持たず、全く前近代的な性格の地域である。

以下今回の調査にあらわれた、いくつかの例をあげて、その片鱗をうかがうことにする。殆ど全部が無電燈地帯で、ラジオはもとより、電燈さえみたことのない児童が大半である。いま単級学級から その村の村役場、郵便局、医師までの距離をみると第 2 表の如くである。距離は km とする。

以上の表で明なように その多くは生活に最も密接な機関さえも 8km 以上の距離をもち、はな

はだしいのは 30km に及んでいる。これらの地域は全部教育行政から僻地に指定されているところばかりである。

そして、これらの地域の人々の生業は教師・管林署の役人を除いては開墾者、半農半漁、農といつても型ばかりで製炭、杣夫、牧夫といった原始産業に従事し、一日筋肉労働をやつて夕暮に寝る生活を繰返している。

これらの地域は近代教育の学習環境でないといつてもさしつかえない。このような地域で、しかも今日の教育を施すためには限界はあるが、教材を理解させるたすけに できるだけ教具、設備を充実する必要がある。教具、設備の充実はいずれの学校でも重要であるが、都会の学校はたとえ学校になくとも、一步校外に出れば教材がころがつている。けれども僻地においては地域そのものには近代教育の教材は皆無といつていい。そこで、学校でなりと設備しなければ児童は経験の機会がなくなる。

ところで、実状は僻地ほど貧弱なのである。単級学校の教師すべてがこの点を訴えている。たとえば理科で実験を必要とする場合も道具も設備もない。磁石のようなものさえない。或る回答には、しかたがないから黒板に磁石の絵を描いて説明しているとあつた。教具と名のつく

ものはオルガン一台と教師用教科書だけ、ひどいになると教師用教科書が唯一の教具だという回答も二三にとどまらなかった。

4

学習指導上の第三にあげられている障害は、児童の欠席、早退である。この欠席、早退の原因としてあげられているのは父兄の教育に対する無関心と、父兄の児童の労働力への依存である。原因は二つあげられているが、根本にある原因は父兄の教育に対する無関心であろう。この無関心が児童の労働力をあてにする結果にもなるのである。

これは一つの解釈であるが、教育に対する無関心ということは、その地域の父兄が学校教育の必要性を少しもみとめていないということである。第一にこれらの地域は他の社会から隔離されていて、そこの人々は他の社会の人々と生存競争をしないですんでいる。それに生業は原始産業で、筋肉労働者である。そして殆ど他所へ出ることなく、殆どその地域だけで生活している。このような生活を繰返しているのだから学校で習得した教養は生活にそれほど役に立つものではない。しかも父兄の学歴は小学校卒業が最高で、大部分は二学年、或は三学年退学である。自分の教養の低さに何の失望もなく、彼等の子供の教育にも関心を持っていない。当然といえば当然である。多忙にまぎれて子供の教育に無関心というのではなく、教育の必要をみとめない故の無関心である。児童の労働力をあてにする問題もここからきている。経済上収入を多くするための切実さから児童の労働力をあてにするのではなく、教育に対して無関心だから些かでも手がたりなければ気軽に学校を休ませたり、早退させたりして子供を使うのである。

このような父兄の態度に対して、学校ではしばしば授業公開を催して父兄の教育に対する関心をたかめようとこころみたり、或は時刻をかぎらず一日に一度は必ず登校する習慣をつけようと努力したり、学校により、教師によつてい

ろいろ工夫をめぐらしている。が、多年の墮性は簡単に改まるとは思えない。

5

以上学習指導上の三つの障害をとおして、単級学校の姿を瞥見するとき、何といつても最大のガンは地域のもつ前近代性格である。これは教育問題としてとり上げられるよりはむしろ政治経済の問題で、この意味から東北地方総合開発計画は期待される。

総合開発計画をまつまでもなく、教育プロバ－の問題も多くあつて、我々はこの方面の努力をしていかなければならぬのは当然である。

教育問題としては

六ヶ学年複式の学習指導を効果あらしめるための方法を更に研究してその実をあげなければならない。

今日の教育内容 特に教科書にもりこまれた内容を検討して、最低必要量を確定し、複式教育、単級教育でも最低必要量は確保しなければならない。

今日の教育内容を理解させるために、殊に僻地の児童に理解させるためにはどれだけの設備と教育が必要であるかを研究して、それを配置し、教育効果をあげる一助にしなければならない。

その地域の文化生活の程度を分析検討し、今日の教育内容とのずれを見出し、ここに妥当な線をえがく必要がある。これによつて学校教育と地域の文化との接触ができる。今後の調査研究もこの方向に向つてすみめられなければならない。

ところで、最後に附加したいことは教師の問題である。単級学校は最も困難な教育で、有能な経験豊かな教師でなければよくその責をはたすことができない。以上あげた四つの方面の研究も教師に人を得なければ効果は期せられない。このように考えて、今日の単級学校の教師をみると、期待をかけるようになっていない。いますこしこれら教師の様子を概観することにする。

第 3 表

勤務年数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
人 数	5	0	6	10	5	4	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
勤務年数	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	計
人 数	0	0	0	1	0	2	2	0	1	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	1	45

勤務年数の点をみると、第3表のように、
となつて、勤務年数6年以下のものが30名、70
%を占めている。それ以後は殆ど全くなつて、
30年ちかくなつてから又数字が出てくる。
30年以上勤務している教師は年数の上からだけ
みれば経験豊かな教師であるうが、彼等の年齢
は49才 50才 54才 57才 58才 59才 60才 62才で、

教育の一線から退いた人達である。更に勤務年
数6年以下の教師を免許状の種別からみると、
臨時免許状18、仮免許状11、無資格1、計30。
普通免許状所持者は一人もない。結局、今日
単級教育は経験浅く、資格の弱い教師と、老齡
の故を以つて第一線から退いた教師によつて担
当されていることになる。